

# 笛吹市探訪

## 笛吹市の史跡④ 姥塚古墳

古代甲斐国の政治的、宗教的中心は、武田信虎が館を甲府の躑躅ヶ崎（つじがさき）に移すまで笛吹市にあり、市内には他市に類を見ないような数の遺跡が残っています。

遺跡の多くは集落跡や水田跡など庶民の生活と直結したのですが、中には地域を支配していた豪族の墓（古墳など）や、古代政庁跡（国府や国衙、郡衙など）、仏教関連遺跡（寺本古代寺院、国分寺、国分尼寺など）があり、特に地域の歴史や文化の中心施設であったことの重要性から、「史跡」に指定され、保護されています。

今回の笛吹市探訪では、市内にある史跡の中から、県の指定史跡になっている御坂町井上の「姥塚（うばづか）古墳」を紹介します。

姥塚古墳は、横穴式石室と呼ばれる死者を葬る部屋を持つ直径約50メートルの円墳で、ちょうどおわんを伏せたよつな形をしています。

死者を葬る石室の長さは17メートル以上あり、その大きさは横穴式古墳としては東日本で一番、全国でも10本の指に入る程です。

この横穴式石室の入り口部分は、

一部崩れてしまい、正確な長さは分かりませんが、現在の入り口よりも数メートル長かったのではないかと考えられます。

また、古墳の周りは幅約10メートルの溝で囲まれています。古墳は南照院という寺院の境内にあり、その本堂を建て替える際に発掘調査を行い、その溝の一部を確認、調査しましたが、深さは現地表から約2メートルもありました。この溝の土を利用して、巨大な古墳を造ったのではないかと考えられています。

さて、甲府盆地の東側に、なぜ東日本で一番の、全国で10本の指に入るような極めて大きな古墳が造られたのでしょうか。

当時を知る人がいないのではありません。つきりしたことは分かりませんが、旧中道町や笛吹市八代町一帯に巨大な前方後円墳が造られるなど、古くから強大な力を持った勢力が甲府盆地東側にいたことは確かです。その背景には、地域の豊かな生産力と中道往還（ななかみちおうかん）、若彦路、

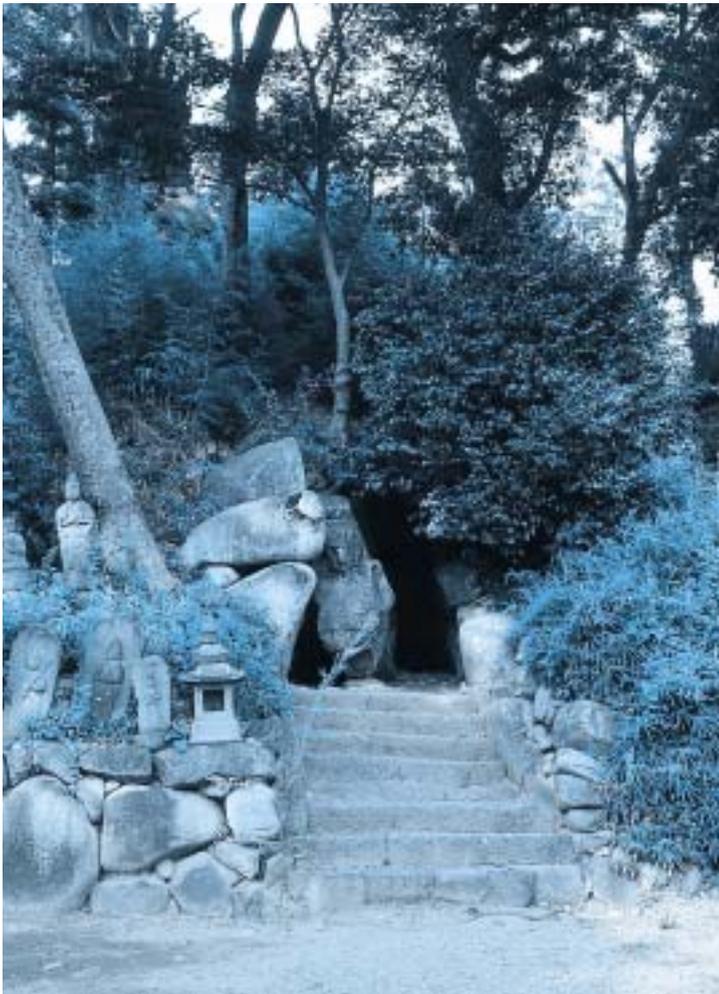
御坂路といった古道がもたらした先進地の技術や文化があったのではないのでしょうか。

もっとも、古道がもたらしたのは、文化だけではなく、時には強大な軍事力を持った中央の勢力を呼び寄せたものでないかと思われれます。いずれにしても、古代甲斐の土着の文化は、いつの時代か中央勢力に飲み込まれ、その勢力がもたらした都の最新技術と思想、文化により統制されたことでしょう。姥塚古墳の被葬者も、そのような時代の激変後、この地を任された人物であったと思われる。

そして、この文化の流れが、やがて国分寺などに代表される仏教文化、春日居町国府や御坂町国衙を中心とした政治の流れを生んでいったのではないのでしょうか。

史跡「姥塚古墳」は、笛吹市の歴史的、文化的財産であり、山梨県の財産でもあります。笛吹市にある多くの「史跡」も、姥塚古墳と同様に、甲府盆地の歴史や文化を解明する上で極めて貴重な資料となります。

市教育委員会では、今後もこれらの史跡の保護と活用に取り組んでいきます。



姥塚古墳（南照院）